

色彩溢れる仙境——黄龍，九寨溝

The Perfection of Colorful Landscape—Huang Long and Jiuzhaigou

楊 英 華

Yo Eika

Huanglong and Jiuzhaigou scenic valleys are both World Heritage sites located in northern Sichuan Province. Huanglong's yellow and green tinted water came from wider mountain terraces. It's a very mysterious water world. In Jiuzhaigou there are many colorful lakes and marshes within this area of a few square kilometers. It is so magnificent and is especially attractive. Of all the waterfalls in the area the fan shaped Pearl Waterfall is the only one with a width over of over 160 meters, dropping over 21meters in a rush to the bottom of a ravine. Because the waterfall spray, reflected in the sunlight, shines like a pearl, it is called the Pearl Waterfall. It is indeed the only waterfall like it in all of China. We cannot help but wonder at it. I wish you could have the satisfaction of seeing this fairy tale world with your own eyes.

はじめに

黄龍と九寨溝は中国の世界遺産で四川省北部に位置しています。黄龍は黄色と緑の水によって織りなされている棚田の流れ水の世界です。九寨溝では色彩豊かな湖や数キロメートルにわたって連なる湖沼群が幻想的で独特の魅力に溢れている。また多くの滝の中で、真珠灘瀑布が最大級のもので、扇状のような形で幅160メートル以上あり、落差は21メートルで、勢いを帯びて谷底へ流れ落ちていくさまは、まことに中国の大地にこそ生まれたものだと賛嘆せずにはいられませんでした。水しぶきが太陽に反射して真珠（珍珠）のように見えるためその命名がなされたそうです。この美しい童話世界を自分の眼で堪能してほしい。

私は毎年9月、夏休みを利用して日本の友人と中国を旅行します。2007年は、9月13日から18日まで四川省にある世界遺産である黄龍と九寨溝に行く計画を立てました。二つの世界遺産を一度に見ることができるので、計画段階から興奮しつつ楽しみにしていました。その時の参加者は、奥永さん、安部さんと私で、60代と50代の女性だけのメンバーでした。3人で仲良く旅行したことは、永遠に忘れられない楽しい思い出になったと思います。

黄龍と九寨溝は、四川省北部に位置し、海拔3000メートルから4500メートルに聳える山の奥にあります。一日の温度差は25度もあり朝から夜までの「一日の中に四季がある」と言われています。黄龍と九寨溝は、1970年代に発見され、1992年には世界遺産に登録されました。観光地として人々に開放されたのは、10数年前ですから、まだ「若くて瑞々しい」秘境です。

私たちは、13日に上海に到着後、一泊して、14日の午前11時に成都に向けて飛び立ちました。2時間後の13時には成都空港に着き、旅行社の人たちが私たち3人を迎えてくれ、車で30分ほど走って成都市内のホテルに着きました。午後の自由行動は、付近を見物することにしました。成都の街はとても清潔で騒音も埃もなく、大変好い印象を受けました。夕方は、楽しみにしていた本場の四川料理を食べたくて、早速美味しそうな店を見つけて入りました。

四川料理と言えば、一番の高級料理は「火鍋」(鍋料理)だと聞いていたので、その「火鍋」を食べることにしました。奥永さんと安部さんは辛い方、私は辛くない方の「鴛鴦火鍋」(鍋の真ん中に仕切りがあって2種類を同時に食べられるもの)を選びました。四川料理は辛いだけではなく、胡椒をふんだんに加えているので、最高に舌を刺激し、全身が焼けるほど熱くさせる効果があり、中国では津々浦々に四川料理の愛好家が数多く存在しています。汗を流しながら美味しそうに食べている二人を見て、私も辛い方に挑戦してみました。どろどろと煮えたぎっていて、黒ずんでいる赤いスープから肉を取り出して食べると、忽ち舌が焼かれるような、また激しい痺れが全身を走り、頭も麻痺してしまうような感覚を覚えました。本場の四川料理の辛さに苦しめられたのにも拘わらず、不思議とその後味は美味しさに変わり、またその激しい辛さと熱さに挑戦してみたくなるような気持ちになります。

2時間近く食べた後、大満足した3人は店を出ました。午後に見付けておいた足のマッサージ店に行って、90分で30元という大変安いコースを選んで部屋に入りました。漢方薬の入ったバケツに両足を20分ほど浸した後、若い男女3人が入ってきてマッサージを始めてくれました。すぐに眠くなるほど気持がよくなり、疲れが身体から抜けていって、あっという間に90分が経ち、3人ともリラックスした爽やかな気分

たされました。奥永さんと安部さんにとっては、初めての体験でしたが、大変気に入ったようでまた受けたいと言っていました。その夜は非常に深い睡眠を取ることができました。

二

15日の朝、6時半に食堂で弁当をもらい、空港に向かって出発しました。成都空港から九黄空港（九寨溝、黄龍の略称）までは、約1時間で到着しました。九黄空港は、標高3500メートルの世界一高地にある空港で、気温は2度でとても寒かったです。空港ではガイドの楊勇さんが迎えに来てくれて、すぐに大型バスに乗り黄龍に向かいました。途中岷山山脈の標高4500メートルの峠を越えるところで、10分間ほど下車して世界一高い青蔵高原を眺めました。一幅の絵のように青々とした空に、真っ白い雲が漂っており、高飛びをすれば届きそうな空の近さを感じました。3人は酸素の薄い空気を吸いながら、高山病に罹ることもなく元気に写真を撮りました。またバスに乗って黄龍へと進み、昼頃によく到着しました。山に入る前にはお腹を満たさないと元気が出ないため、チベット族のレストランに入りました。他の旅行者と8人で一つのテーブルを囲んでチベット族の料理を食べました。ちょっと慣れない味のものもありましたが、まあまあ美味しいものもありました。ゆっくり味わう時間がないため急いで食べ終わって黄龍世界遺産の入口に行ってみると、すでに横に八列、縦に200メートルほどの行列が長々とできていました。さすがに人気上昇中の「若い」世界遺産の名を冠した名所だなと実感し、その観賞者の一員になれたことを誇らしく思いました。ガイドさんの紹介によりますと、毎年100万人以上の観光客が来ているそうです。3分の2は中国人で、3分の1は外国人に占められています。特徴としては中年以上の人が多いということです。杖を突いているお婆さんやお爺さんもいます。リフトに乗って山の中腹で降りて、そこから歩いていかなければならず、1時間や2時間歩いても到着しません。標高3500メートル以上の山に登るのは、18年前の富士登山以来のことでだんだん疲れが出てきました。歩幅が狭くなるにつれ呼吸もやや困難になり、最後の段階に至った時にはついに元気がなくなってしまいました。しかし、旅慣れて、しっかりした安部さんは、歯を食いしばって一人で登っていききました。奥永さんが「休みたい」と言ったので、私も一緒に立ち止まりました。ここまで来て登頂を諦めるのは何と言っても情けない、もったいないと思う気持ちに支えられて、10分ほど休んだ後、二人は少し体力も回復したので、また一歩ずつ登り始めました。最後の階段では本当に体力や気力と闘いながら一歩一歩登って山頂にたどり着いたのです。

目の前には、今までに見たことのない黄色の優雅な線とエメラルドグリーンの水によって織りなされた棚田の流れ水が、快い水音とともに美しく広がっています！ 石

灰化した池壁が幾層にも連なり、段々畑のように広がっている水の美しさに思わず息を飲んでしまいました。黄龍という名前も、太陽の光に反射して龍の鱗のようだというところに由来していますが、まさに大自然の傑作、神業としか言いようがありません。この「人間瑤池」の仙境をやっとの思いで登ってきて、自分の眼で見たという幸福感は、全身に溢れ神聖な達成感を味わった瞬間でもありました。まことに「至福の時」というべきですが、ただの美しい絶景ならこれほどは感じないでしょう。そして、長い道程、酸素の薄いところで闘って挫けなかった自分と友人の強さを発見したからこそ感無量になったのでしょう。70歳に近い奥永さんと安部さんは、本当に意志の強い方でよく頑張ったと称えなければなりません。途中で挫折して帰った人もいました。人生もこの登山に似ているものだと痛感し、意志の強い情熱のある人だけが自分の弱さや一時の困難を征服できるのだとの思いにつつまれました。この達成感、きっと今後の人生の力になると確信し、困難に挑戦する瞬間にこそ人間は成長するのだと実感しました。

「五彩池」の名に勝るとも劣らない絶景を長時間眺めてみたい気持だったのですが、そこは酸素の最も薄いところなので惜むように一步に一度振り返りながら降りました。この美しい景色が山頂だけだと思っていたら、何と下山する途中に数メートルごとにエメラルドの宝石が大地に嵌め込まれているような幻想的な池や流れ水が大小さまざまありました。まさに一つずつ驚嘆の声を連発しながら、疲れも忘れ心身ともに楽しむことができました。苦勞して登ってきたお客さんを慰めるために、まるで山が沿道に最高のご褒美を用意してくださったと思わせる風情さえあります。そのおかげで輕輕と標高約3600メートルの山道を降りました。黄龍の全長3.6キロメートルに及ぶ渓谷には、3400ほどの湖沼群が点在しています。もしもこの人の目と心を楽しませてくれる夥しいほど美しい景色がなかったなら、下山は泣きたくなるほどつらいものだったと思います。富士山の下山も体験している私は、とりわけこの違いを痛感していました。美しい景色を求める人々の気持が困難を克服する原動力になっています。魅力に溢れた大自然は人々に慰めと癒しを提供し、人間と自然が本来相互依存の関係にあるという摂理も身を以て感得しました。

時間の関係で地下の溶岩洞窟や鍾乳石仏像を目にすることができなかったのは残念でしたが、またの楽しみにしておきます。

絶景に浸った喜びを満喫した私たちは、夕方6時にまたバスに乗って黄龍から九寨溝へと向かいました。途中二つの山頂を越えなければならないとの話に、不安な気持になりました。案の定、曲がりくねった山道をぐるぐる廻るうちに、私達三人は車に酔い始め、目眩と吐き気が襲って、横になっても坐っても気分がすぐれない状態を3時間以上も我慢していました。これはいままでに体験したことのない辛さでした。やっとの思いでホテルに到着して、すぐレストランに案内されましたが、10数皿に盛

られた美味しそうな料理が目の前に並べられたのに、全然食欲がわかないどころか、吐き気さえました。結局、部屋に戻ってもシャワーを浴びる気力もなくすぐ寝てしまいました。翌朝6時を迎えて目が覚めると、昨日の吐き気など堪えがたい気分がけろりと治って、普段と変わらない、元気になった自分を発見し、昨日ガイドさんが言った「高山病は一晩寝れば治る」という言葉を思い出しました。生命力の適応性、本能的蘇生のメカニズムに感心せずにはられませんでした。

三

さあ、16日は今回の旅行の最大の目的地である九寨溝に行く日です。「元気になって楽しむことができる」と叫びたいくらいで欣喜雀躍の足取りで出発しました。車は山の入口まで2キロ離れたところで止まり、ここからは歩いて入らなければならないとのこと。中国が誇る最大級の名所で、環境保護のために少しでも車の排気ガスを排除しようと考慮しているのはさすがです。今大気汚染やらガソリンの価格高騰やらと騒いでいますが、罪の半分は車にあると思います。もし、全世界の国が九寨溝のように車の制限をしたらきっと空気がきれいになります。そんなことを思いながら、2キロの距離があつという間に終わりました。入り口の周辺は、さまざまな花で飾られ、仙境に相応しい歓迎式のように、清らかで静謐な雰囲気なかで迎えられました。ここは世俗、喧騒の世界と切り離された別天地、桃源郷だとしみじみと感じましたが、中に入ると観光客を待っているバスが何台もあるのを見て、驚きました。聞いてみると、このバスは電気エネルギーを使っているために排気ガスを出さないそうで、少しほっとしました。55.5キロ平方メートルの山を一步ずつ歩くのが大変なために、親切にバスを設けたのでしょう。やはり人間が活動する場所では、機械が欠かせないものですね。平坦な道路ならいざしらず、山道を降りたり、登ったり、曲がったりしながら秘境を訪ねることだから、バスがないと大変難儀なことは明らかです。バスの停留所が3キロごとにあることでとても助かりました。特に60歳以上の方が多いいことを考えれば、自然には悪いのですが、やむをえないことだと考え直しました。

山高く谷深い九寨溝には大小114の湖沼、17の滝、47の泉、11の急流などがあり、まさに動と静、急と緩の奇観によって織り成されている世界です。私たち一行はまず左にある則查窪溝に入りました。そこで清らかで青と緑の中間色の湖に出合いました。その湖が淑やかに漂っている一面の鏡のように見え、この幻想的な雰囲気に包まれている私たちは、大きな声を出すには忍びがたいためやや小さな声で「綺麗だ」、「美しい」、「幻想的だ」などと言って動くのを忘れたように立ちすくんでいました。みんなの目の中には、輝いている湖が浮かんでおり、顔までが明るくなった光景は今までに見たことのないものでした。人間が自然の中に溶け込んだというべきか、自然が人間

を包み込んだというべきか、言葉で言い表せないほど人間と自然が一体化した奇観に感動しいくら見ても飽きませんでした。その次もその次も出合った湖がいずれも水の極致と言うべきもので写真をたくさん撮りました。100以上の湖を見るのは無理なので、なるべく大きいものを選んで見るしかありませんでした。緑、黄色、青、藍色、翡翠色、エメラルドグリーンなど、一つの水域では考えられないほど多彩で変化に富んでおり、色彩の極致による水の世界を走馬灯を見るように堪能でき、どれほど興奮したことでしょう。特徴としては、湖底に倒れた枯木、植物、小石などが透明な水を通して絵のように見え、それらは岸辺の森林の投影と一体化して幻想的な世界を現出しています。数十分歩くごとに、まるで個性を競っているようにさまざまな色と形の違う湖を見た時、動画の中で人々が泳いでいるかのように見えた感動が今でも脳裏に刻まれています。至福に包まれたというのはこのような状況を指しているのでしょうか。道中に讃辞を連発したあげく、喉が痛くなってしまいました。

中国では九寨溝について次のような賛美の言葉が誕生したほどです。「黄山归来不看山，九寨归来不看水」（黄山から帰ってきたら、山を見ない。九寨溝から帰ってきたら水を見ない）と。中国の水景の王者と冠された所以も頷けました。

どうしてここに五色にきらめく湖沼群ができたかという点、実は大変美しい伝説があります。男神の達戈が美しい女神の色嫫に恋をして、心を込めて風と雲で磨きあげた「風雲宝鏡」を女神に贈りました。女神は大喜びで大事にしていたのですが、このことを知った悪魔は嫉妬のあまり魔法を使って「風雲宝鏡」を地上に落してしまいました。その「風雲宝鏡」が、この九寨溝の深山幽谷に砕け散ったために夢幻的な仙境が現出したと伝えられています。神様のプレゼントだと思えば、この地上にあり得ない美しい仙境の存在も理屈として納得できる思いでした。

色彩豊かな湖を満喫しただけでなく、その合間に見た滝の絶景は再び私たちの心を弾ませ、胸を躍らせました。多くの滝の中では、真珠灘瀑布が最大級のもので、扇状のような形で幅160メートル以上あり、落差は21メートルです。勢いを帯びて谷底へ流れ落ちていくさまは、まことに中国の大地にこそ生まれたものだと言わずにはいられません。水しぶきが太陽に反射して真珠（珍珠）のように見えるためその命名がなされたそうです。3人ともこの雄大な滝を見てしばらく呆然とした状態が続きました。やっとわれに返った後、みんながしみじみと「素晴らしいですね、雄大ですね」と讃嘆していました。この世界一美しい滝に感動した思いが李白の詩「望廬山瀑布 其二」（廬山の瀑布を望む 其二）を呼び起こしてくれました。

日照香炉生紫煙
遙看瀑布挂長川
飛流直下三千尺
疑是銀河落九天

日は香炉を照らして紫煙を生ず
遙かに見る瀑布の長川を挂くるを
飛流直下 三千尺
疑うらくは是れ 銀河の九天より落つるか

と。疲れた気持もどこかへ吹っ飛んで、はるばるとここまで来てよかったと口々に感想を述べました。この時ガイドさんの言った言葉を今でも思い出します。「人間は気違いです。金を使って辛さを買うのだから」と。これは旅に疲れたことを揶揄した鋭い言い方ですが、この言葉はいみじくも車酔いや吐き気や足の痛みなどに苦しめられた時の状態をよく言い当てています。昨日の夜自分が辛かった時に、本当に自分の馬鹿さ加減に腹が立ちました。しかし、このような美しい湖、雄大な滝を見て歩いたら、昨日の辛さなんかたいしたことではないと思いました。もし、機会があればまた来たいと意気込んでいます。自然の魅力がここまで人間の弱さを治し、また勇気と力を与えてくれるものだということを発見したことは今回の旅行で得た収穫の一つです。その喜びは、今までに体験したことのない、快い刺激を受けて興奮した時のような感覚で、その後も長く胸中を去来し清澄な気持に包まれていました。

見どころの尽きないこの仙境の万分の一も伝えられない憾みがありますが、読者はやはり自分の眼で確かめるのが一番で、まさに「百聞は一見に如かず」です。感激した思いを込めて詩を二首作ったので、ここに発表させていただきます。

「訪黄龍、九寨溝有感」一 「黄龍、九寨溝を訪ねて感有り」一

藍天近人似有語	藍天 人に近く語有るに似て
白雲緑屏更無瑕	白雲緑屏 更に瑕無し
不遊哪知絶佳処	遊ばず絶佳の処をどうして知るか
彩筆难绘天然画	彩筆 天然の画を絵き難し

「訪黄龍、九寨溝有感」二 「黄龍、九寨溝を訪ねて感有り」二

奇峰修林作秀園	奇峰修林 秀園を作る
翠湖晶波帶霞煙	翠湖晶波 霞煙を帯び
黄龍九溝鬼神絵	黄龍九溝を鬼神が絵き
客魂驚艷飛雲端	客の魂 艷に驚き雲端に飛ぶ

四

15日、16日は九寨溝のホテルに二晩泊まったので、16日の夕方にチベット族と交流する機会を得ました。黄龍と九寨溝に住んでいる人たちは、チベット族、チャン（羌）族、回族、漢民族で見事に共存しています。到着した私たちは、まず庭の門のところでチベット族の女性から哈達（カタといい、マフラーのような薄絹）を首にかけていただきました。これはお客様を歓待する儀式の一つです。それからすでに野菜料理や肉料理が並べられている部屋に案内され、18歳の女性が歓迎の話や歌をもって明るく親切に接待してくださいました。彼女の助け役としてお姉さんやお兄さんたちも登場

し、チベット族の歌や漢族の歌で場を盛り上げました。料理の色は、黒っぽいもので独特の味がしました。特に食事の途中で運んでくれた焼きたての子牛や野生鳥の肉を食べてみたところ大変新鮮で美味しかったです。若い娘さんの話によると、お父さんは一人ですが、お母さんが3人もいることや、男性が複数の女性と付き合っているというのを聞いた時には驚きました。その場にいた男性たちは羨ましそうな顔で聴いていた様子でした。商売とはいえ、3姉妹が歌やトークで一生懸命にもてなし、中国語の標準語もきれいで流暢でした。わざわざ標準語の学校に行って習ったそうです。チベット族の挨拶言葉について一つ教えていただいたことが興味深いものでした。人々が出会って交わす言葉の一つとして「**扎西特朗**」(ザシツロウ)というものがあります。「ニーハオ」という意味ではなく、「吉祥如意」という深い祝福を込めた言葉で、日常的に使われたそうです。宗教心が強い民族の文化の一端を窺えた思いです。最後にチベット族の簡単な踊りも習って、みんなで輪になって楽しく踊りました。1時間半ほど滞在してからその家を出ました。チベット族の家庭訪問もチベット族の人と話すことも初めてのことで、大変新鮮な感銘を受けました。その一方、宗教のことを除いていえば、少数民族も漢民族とそれほど変わっていないのではないかという漠然とした思いを抱いていました。ほんの少しですが、チベット族の生活に触れたことは大変貴重な体験で、記憶の一コマとして永遠に私の心に刻まれるに違いありません。

今回の旅行では本当に初体験が多くて、しかも世界一のものを見たり、深い感動を受けたりして大変充実した6日間でした。奥永さんの中国語も年々上達していることを実感し、私の代わりに何度も中国語で用事を済ませることができました。ここで改めて中国に好感を持っている奥永さんと安部さんに感謝の意を表すと同時に、今回の旅行はこれまでの旅の中で最も思索に耽ることが多く、またさまざまな発見もあり、楽しくて有意義な日々だったことをここに綴っておきます。